

農業環境インベントリーの意義・役割を改めて考える
— 8号の発刊に当たって —

Reconsideration on Significance of Natural Resources Inventory
In Publishing 'Inventory No.8'

對馬誠也*

Seiya Tsushima

2001年から2005年（第一期中期計画期間）に所属していた農業環境インベントリーセンターに、2009年4月1日付けでセンター長として戻ってきました。センター時代には、微生物分類研究室（当時）の全研究員一丸となって当研究所所蔵の微生物標本や研究成果をデータベース化して発信するシステム（微生物インベントリー）の構築に取り組みました。その一方では、意外に農業環境に棲息する微生物の情報が少ないことがわかったので、イネ、ムギなどいくつかの農作物に棲息する微生物を収集し分類してその情報をデータベース化しました。このような作物上に棲息する微生物インベントリーは現在においても世界でも希有といえます。担当者としては「植物の表面」という特殊な環境にいる生物が、植物の生育に何らかの役割を果たしているのではないかと、「特殊な環境」に棲息する以上「植物棲息菌ならではの特殊な機能」を持っていて薬や食品等の開発に役立つのではないかなどと考えながらインベントリー情報を蓄積してきました。その一方で、当然のことながら、会議等において、それら微生物を何のために集めるのか、何の役に立つのかという質問が出され、その対応を常に考えてきました。中期計画の課題の基に、「インベントリー（目録）」の構築を目指しているとはいえ、「単なる情報の蓄積」作業には、必ず、このような質問が出てくることも明らかです。

農業環境インベントリーセンターには、少なくとも情報数においては微生物を上回る土壤、昆虫情報があります。たとえば、土壤に関しては、土壤標本（土壤モノリス約250点）をはじめ全国の土壤に関する各種の情報や土壤図情報などが多数あります。また、昆虫においても国内屈指の数を誇る膨大な昆虫標本（130万点）や貴重な文献情報などがあります。微生物情報と同様に、これらの情報はいずれも基盤的な、地味なものではあるため、時に、これらの膨大な情報が「何の役に立つか」などの質問が必ずあるのも事実です。これらの情報は長い時間を掛けて、少しずつ集められたものですが、一方では、常に一定の資金を投資して維持しているとも言えますので、その成果の「見える化」が求められています。

こうした情報が実は土壤中の物質（炭素、窒素、農薬など）の動態解析に役立ったり、昆虫標本や文献情報が国内で問題になった害虫の同定に役だったりしていることは一般にはなかなか知られていません。

こうした状況において、わたしたちは改めて、インベントリーの意義を広く国民に知らせるとともに、従前にも増してこれらインベントリーの利活用を進めなければならないと考えます。講演会、シンポジウムやインベントリー展示館の見学者に、より分かりやすく解説することに心がけるとともに、IT技術をさらに活用して利用者が必要な情報を簡単に見られるようなWebの活用も必要だと考えます。

「農業環境インベントリーの充実は基盤情報として研究や技術開発にとっても重要である」という認識が国民に広く伝わるようにしたいと考えます。

*農業環境インベントリーセンター長

Natural Resources Inventory Center

インベントリー、第8号、p1 (2010)